

「お姉さん、暇そうだよね？」

後ろから声をかけて来たのは、長髪で少し大人びたインキュバスだ。シヨタが多いインキュバスの中でも少し年上に見える。（年上と言っても20歳前後くらいだろうが）。筋肉質で逞しい身体でありながらも、美女顔負けの美しい顔をしているそのインキュバスは、メイスの正面に立った。

（す、すごいイケメン・・★）

あまりの美形に驚愕するメイス。

実はメイスはイケメン男子が大好きだった。シーメールでありながら、イケメン男子に犯されたい願望が昔から強かったのだ。

跪（ひさまず）いてデルタたちのセックスを覗き見していたメイスの目の前に大きなデカチンがボロンと飛び出してきた。まだ勃起前だというのに肉がみっちり詰まったぶっといデカチンポだ。

不意にイケメンインキュバスは一步、前に出た。

「ズン♥」



「ごめんね。重たいでしょ？お姉さん、とてもいい位置で座ってるからさ。ボクのデカチンポ、顔に乗せちゃったあ❤️どう？シーメール族にも負けない質量と大きさじゃない？」

「あ！あわわあ★」

メイスはイケメンチンポに一瞬で引き込まれてしまう。極上のズル剥けデカチンポは凶悪過ぎた。勃起前だというのに鈴口からはカウパー汁がツルツルと漏れ出している。

「くくく！コイツ！雑魚すぎなんですけど。ボクの金玉に鼻息がすんげーかかってるんですけど？発情し過ぎだって💖」メイスの顔面にチンポを乗せたまままでインキュバスのフェムトが笑う。

「はふうゝ、はふう★」舌を出し、鼻息荒く上目遣いでアへってしまうメイス。

「うふふ、ぶっといチンポで顔を潰されて・・・興奮しちゃうよねゝ💖」

「はひい★オチンチン、くださあい★」

「ああん？それじゃあ、ボクと契約してよ。これくらいくつか質問するからボクの亀頭にキスしてよ」

「はひい★」

「ほら！綺麗なお姉さん💖ボクのオチンポをしゃぶりたいのかあ？」

「ブチュ★ブツツチュ★」

「あはは！コイツ！ソツコーじゃん💖」

「次の質問。おいマゾメス、オマンコにデカチンをぶっ込んで掻き回して欲しいか？」

「ブブチュ★ブチュ★」

「あはは！もう完全に堕ちてんじゃん！」

「ちようだいいいい★イケメンチンポおお★」

メイスは涎を垂らしながら必死に懇願した直後、フエムトに草の上へ押し倒された。正常位で覆い被さってきた逞しい身体。熱く脈打つ極太チンポが、ぐしょぐしょに濡れたメイスのオマンコに先端を押し

当て・・・ぬぷう♥ぬぷう♥



「んあああああああっ★デカチン来たあ★いっ、いくっ、いっちゃううううっ★！」

挿入されただけでメイスは即イキした。

凶悪な太さの肉棒が子宮口を一瞬で突き破るような衝撃に、膣内が激しく収縮し、大量の潮を勢いよく噴きながら全身をビクンビクンと痙攣させた。

フェムトは容赦なく腰を振り始めた。

重く深く、子宮を直接叩き上げるようなピストン。

「ぬっぷ！ぬっぷ！ぬっぷ！ぬっぷ♥！」

「ひぎいいっ★あっ、あっ、あああっ★！！ま

た・・・またいくっ★！！いぐ★、いぐ★、いぐうううっ★！オマンコ★壊れちゃうううう★」

メイスは正常位のまま、立て続けに中イキを繰り返した。

「あはは♥お姉さん、ザコ過ぎ！マジでシーメールの戦士なのかよ？マジで即イキしまくりじゃん♥おら、ボクのチンポは美味しいかあ？ああん？」

「ちゃ、ちゃいこう（さ、最高）でちゅうう★」



10回、15回と数えるのも馬鹿らしいほどの連続
絶頂がキマツた。メイスは目が完全に上吊り、舌を
長く伸ばしたアへ顔で涎を垂れ流し、子宮が何度も
痙攣するたびに愛液と潮が白く泡立って飛び散る。
フェムトは片手でメイスのビンビンに勃起したデカ
チンポを強く握り、親指で亀頭をぐりぐりつと激し
く捏ね回しながら、腰の動きをさらに加速させた。

「はひゃあああぁっ★!!!上手うう★ほひいい★だ

めええっ、亀頭そんなにこねくり回さないでええっ
★いくっ★またいくうううっ★！」

ようやくフェムトが動きを緩め、メイスの耳元で甘く囁いた。

「まだまだイかせてあげる。お姉さん、次は自分で腰を振る番だよ♥」

フェムトは仰向けに寝転がり、メイスを抱き上げて自分の上に跨がせ、騎乗位へ移行した。

メイスはイキ過ぎて腰がガクガクと震えているのに、両手で自分のオマンコの唇を広げながら、フェムトの凶悪に反り返った極太チンポを自ら啜え込むとする。

「はひい★はひい★入るうう★このデカチンポが★
また私のマンコに・・・★」

「ぬぷうう♥ぬぷうう♥」

ゆっくりと腰を落としていくと、根元まで一気に飲み込んだ瞬間、子宮が押し上げられる強烈な圧迫感と共に、再び激しい絶頂が爆発した。